

文学博士佐藤武敏君の『中国古代絹織物史研究』に対する

授賞審査要旨

上巻（先秦秦漢篇）は先秦・秦代の絹織物の起源を明らかにするため、文献と出土品を対照的に取扱い、文献では殷・周・春秋・戦国時代の史料を渉猟し、その推移を論じて主題に入り、日本の考古学では詳しく知られていなかった多くの実証資料を考証し、論述のはじめに研究史を回顧して論攷を進める。

先ず絹織物の起源を、文献・伝承と出土資料の対照研究により、殷代の養蚕に溯り、周・戦国に至る文献と考古学資料を合わせ、これに技術の地域性を加えて論じ、精細に絹織物の組成を検討して基礎構成を明らかにし、特に生産工業の組織に着目し、やがて先秦以来の貢税とする重要物資への移行状態を説いて、これは絹織物生産上の重要事項とした。同時にこのことは流通に連なるのであるが、贈与による場合と売買・物々交換をあげる。

かくして精緻なる視角を漢代につづけ、絹織物の品質向上と生産の増大をこの面からも明らかにしつつ、生産形態に及び、宮廷工業と農村副業の生産状況をとりあげ、官工と私工による生産の歴史を捉える。

すなわち高級品は宮廷工業により、民間工業で生産されたものを貢税品として納めしめ、国家はこれをもって財政の基礎ともし、贈与にも使用した絹織物の普及・流通の状態を論じる。特に贈与形態には他国との国交において、使者の携帯する贈与の絹織物は、大量であった。これは相手国の珍貴な生産品との物々交換による貿易行為である。

下巻（六朝隋唐篇）もその研究体系は上巻に従い、先ず六朝の絹織物も文献と出土品との対照をとりつつこれを論じ、中国各地における考古学遺跡とその出土資料と所在を追究し、絹織物の種類・文様等については表示をもってこれを援ける。

生産面の研究では、六朝における主要流通形態を観察して、絹織物の価格に及び、その当時の経済状態を大観するとともに、交通に重要な役割をもった馬との交換に着目して、突厥との貿易を挙げ、経済史的な重要性を説く。

つぎに隋・唐の絹織物の観察に移り、文献・考古学考察ともに論攻はいよいよ精緻を加えて、従来の研究をはるかに凌駕する。とくに各種考古学関係の資料は日本に纏ったものがないので、日本考古学・染織工芸等実地面への寄与も大きい。この事實は、第二部「唐代の生産」においてどの種類が、どこで生産されたかという点についても、これを表示して各地産業の状態を明らかにする。この表示による唐代絹織物の種類・産地とその移動、生産者の社会的位置に対する観察は研究成果の一つといえる。

つづいて生産は織機の性能に基づくことを指摘するとともに、織機の構造を詳しく記述する。かつ日本古代の織機とも対照して、宗像神社辺津宮（福岡県）神宝の「金銅雛形機織具」（社地出土）を本冊の口絵に採用して、古代大陸と日本の織機の関連と織機を理解せしめ、併せて日本における現存資料に観察を与えるが、この中で「擣衣考」の文学作品を加えて論述を進め、再び唐代の生産形態に入り、農村均田制下の農民に桑田を給付して進めた養蚕事業と、これら生産品の税に基づく負担・労働従事人員の種類・その条件などを検討し、生産品の贈与・俸禄・売買・貿易（物々交換を含む）等への観察の中で、経済的見地から絹織物流通の主要条件とする、価格判定について実物貨幣とし

ての評価を論じ、中国古代の社会経済の中樞をなしたことを指摘し、併せて絹貿易に関する法令を通観して上下二巻の論攷を終るが、最後に「上巻」補論として周・漢代の出土考古学資料への観察を添える。

本研究には、なお若干の補正を要する個所及び仏教の史伝関係史料等の捜求について、残る課題も少なくないが中国絹織物史研究としては、幾多の新しい視野を開きあるいはつぎの研究に対する指向を示すものが多い。